

江戸時代の銅インゴット「棹銅」

展示場4階の大阪の科学史コーナーにある展示「住友長堀銅吹所」では、江戸時代に作られた銅のインゴット「棹銅」を展示しています(写真1)。

江戸時代、日本各地の鉱山で採掘された銅は、60～70%程度の純度に高められた後、大阪に送られて純度99%にまで精錬され、インゴットや各種銅製品などに加工されました。大阪に複数あった銅の精錬所(当時は銅吹所と呼ばれました)の中で最大規模のものが、現在の大阪市中央区島之内一丁目にあった住友長堀銅吹所です。

展示では、当時の銅精錬の様子を紹介や、1990年に銅吹所跡地で行われた発掘調査で出土した遺物のいくつかを展示していて、その中の一つが「棹銅」と呼ばれるインゴットです。棹銅は海外との貿易に使うためのもので、大阪から長崎に送られて取引されました。当時、日本にとって銅は重要な輸出品で、例えば西暦1700年前後においては、オランダとの貿易額の80%程度を銅が占め、年間15万吨程度の銅がオランダへ輸出されていたそうです。加えて中国などとの貿易にも使われていましたから、日本の銅産出量や銅吹所での精錬量の多さが窺えます。



写真2: 棹銅のレプリカ



写真1: 展示中の棹銅

棹銅の表面はもともと赤銅色をしていましたが(写真2)、出土品の表面は残念ながら錆などのために当時の色は見られません。しかし、展示中の棹銅は、分析調査のためにカットされたもので、写真1のように断面が見えています。よく見ると、銅の美しい色を確認することができますので、ぜひ間近でご覧になってください。

嘉数 次人(科学館学芸員)